兵庫生物 12 (3)：146－157，2002

ヒマラヤ・カラコルム周辺の山旅から

自然と生物

大 賀 二 郎*

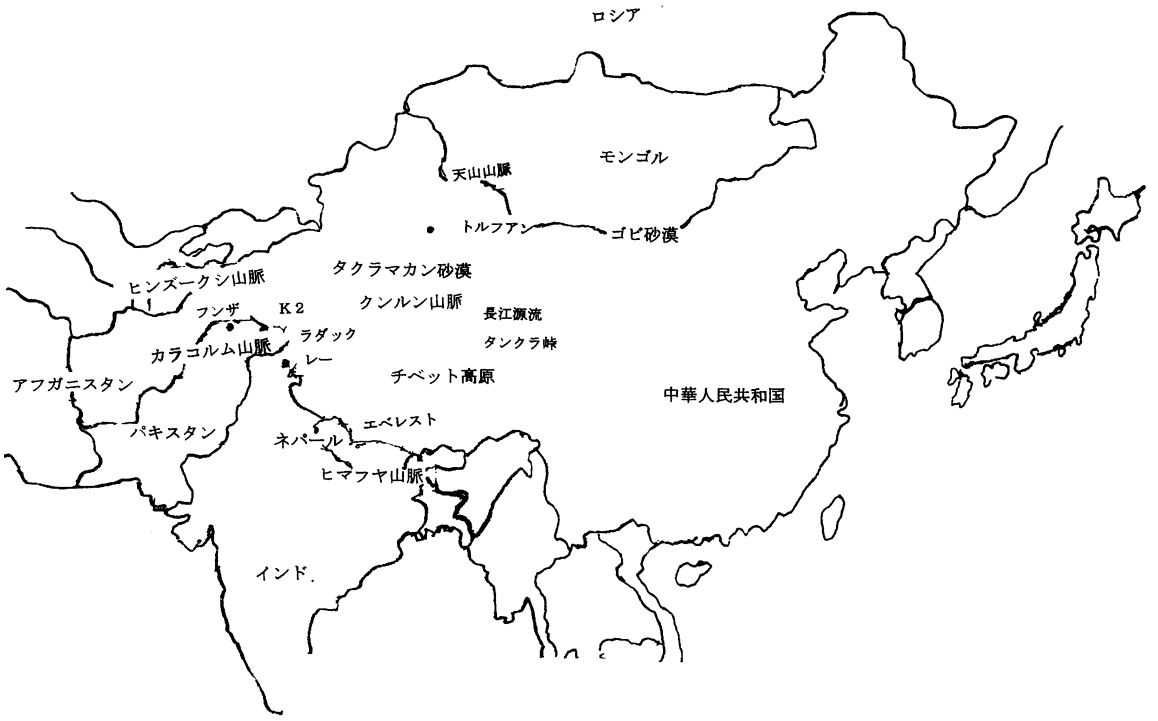
The nature and life of the Great Himalayas

Jiro OGA

はじめに

ユーラシア大陸のほぼ中央部に，第三の極地と言うべき広大な空白地帯がある。ヒマラヤと一連の山脈は，世界の屋根とも言われており，そしてその北部にはタクラマカン砂漠を始めとする不毛の乾燥地帯が広がっている。人の居住環境としては，極めて厳しく，動植物の存在も希薄である。しかしその立地から古来，シルクロードなど交易，文化，民族交流の要衝でもあり，固有の文化も発達していた。

私は，この捉えようもない地域に関心をもち，数年前から断片的に旅を続けていた。トレッキングをしたり，四輪駆動車で砂漠を縦断したこともあった。そして地域ごとに記録し，写真も残してきた。その撮影枚数は4,000枚近くになるだろう。少し大胆であるが，この地域をグローバルに取り上げてみた。系統だった作業はできないので，写真を用いながら，各地のポイントアウトを試み



ヒマラヤ・カラコルム・チベット高原周辺概念地図

* 森羅万象の館 博物館学芸員

てみた。見たり，聞いたりの，ヒマラヤ東西南北旅行記程度の意味にご理解いただければ幸いである。なお地質や生物分布など実地に確認できなかったものについては，可能なかぎり文献を参考にした。

エベレスト山群周辺

2000年11月22日から同12月６日まで，エベレスト山群をトレッキングした。サガルマータ国立公園地域である。ネパール首都カトマンズに現地入りし，登山基地ルクラまではローカルの航空便で山腹の飛行場に軽業芸で着陸。そこからドウドコシ水系の上流域に扇形に広がる山岳・渓谷をトレッキングすることになる。

一行25名，シェルパ･ポーター･キッチン20名，コウギョ（ヤク）14頭の編成。山道を延々さながら大名行列。リーダーは田部井純子（初の女性エベレスト登頂者）であった。

ルクラ（海抜2,804m）を出発。ナムチャバザール（3,440m）を経て最終地点パンポチェ（3,985m）まで往復８日間，毎日８時間，テント泊の行程であった。

パクデイン，モンジョ，ジョサレの村落を経てナムチャバザールまでは，大渓谷。山あり，谷あり。難行苦行の連続。雲が懸かる断崖絶壁や揺れる吊り橋。このあたり3,000m-3,500mでカバノキ，ツツジの樹林帯である。渓谷には雄大なウラジロに似たシダが見られた。また洞の入り口あたりにヒカリゴケ状の緑の光を反射する苔が付着していた。

ナムチャバザールは山岳の町。エベレストビュウホテルを始めホテル，民宿が立ち並ぶ。山岳資料館や診療所の施設も整っている。このあたりは低潅木帯となり，草原もまじっている。もう高山植物の花時も過ぎて，わずかに小形のフデリンドウの深い濃紺が印象に残った。ここから初めてエベレストが見える。

さらに一日行程でタンボチェ（3,867m）へ。一旦深い谷に下る。サルオガセが垂れる幽邃な原生林である。

また登り急坂の連続で，ここにはシャクナゲの植生がある。タンボチャは台地上にある。チベット仏教の僧院があったが，一旦不審火で焼失し，立て替えられたところであった。最終地点パンボチャの道は雪道となった。雪上にユキヒョウの足跡があった。通常は肉食であるが，餌がないと潅木の実を食べると言う。姿を見せることはまずない。人間の姿を先に見つけて隠れるからである。

途中の小さな僧院に雪男（イエテ）の頭髪があった。通常は金庫に保管してあるが，特別に見せてくれた。

ここからは登りの岩場で，雪や氷があってかなりきつい。

パンボチャから眼前に広がるエベレスト山群の眺望は圧巻。主峰エベレスト(8,848m)は絶えず雲を巻き上げている。その岩壁を横切るイエローバンドがこの山の目印で，海底だったときの化石層と言われる。前山のローチェ（8,516m），アマタブラム（6,856m）の大岩壁も壮絶な重量感で迫る。ここには小村落があり，ときにネパールの国鳥極彩色のダフェーが見られると言う。

ヒマラヤ東部の動物は、哺乳類ではツキノワグマ，ユキヒョウ，ジャッカル，レッサーパンダ、ジャコウジカ，トガリネズミ，マーモット，ナキウサギなど。

鳥類ではシロヒゲワシ，イワヒバリ，ベニハシガラスなど。渡り鳥など含めて118種が観察されている。蝶類では固有種をふくめて30種が知られている。
植物は花時が終っていて，観察できなかった。開花とモンスーンの時期と重なると言う。

山行が順調に進んだので，予備日の３日間はタライ平原のチトワン自然公園で過ごした。亜熱帯圏の野生生物保護区である。ロッジに宿泊。象の脊に乗って，森林や湿原に入る。インドサイ，トラ，ワニなどが生息するが，見られたのは二頭のインドサイであった。林中の樹幹にはセロジネやデンドロビュームが見られた。

ラダック

1997年７月10日から同７月19日までラダック地方の山旅を行う。インド西北端，地形としてはヒマラヤ山脈がカラコルム山脈に移行するところにある。砂漠の中の山岳で，照りつける太陽，氷河からの烈風が吹き付ける。氷と焔に削られた裸岩地帯である。インド，パキスタン，中国そしてタジキスタンの国境緊張地帯にある。厳重な入国審査を受け，車で30分。かっての王国の廃都レーの町に入る。中央岩山の中腹に王宮がかっての栄華を残している。巨石に固められ，難攻不落の城郭であった。内部にいると，異様なラマ教の壁画。誰もいない暗闇の中は留守番の僧侶がひとりと，高い天井に巣食うコウモリたちだけであった。少し離れてモスクがあった。

この僻地にもかって異国の軍隊や文化が駆け抜けて行ったことを物語っている。それらとは関係なしに城下には雑然とバザールがあり，人で溢れている。大道を牛が涎を垂らしながら闊歩する。人も関せず，牛も関せず。

町から一歩外に出ると，とてつもない灰色の世界，月面のようである。しかし岩山の上には必ずと言ってよい程僧院が聳えている。ヘミス，テクセ，サンカール，セモ，スピトーク，アルチなどの地方を訪れる。僧院の下にはポプラに囲まれた小さな村落があって，ペラックという山高帽の女性がこちらを見ながら，のんびりと働いている。

当然のことながら，生物相についても不毛の大地である。唯一の野生の花はタマリスクとルリタマアザミであった。岩場には20cm程のすばやいトカゲをよく見かけた。

しかし，インダス河の源流であるサンスカール川の流域には部分的に湿原があって，タデ，アシなどの一面の群落がある。腐植層の上にコモウセンゴケ，ミミカキグサなどが見られた。

村落は、谷あいにあって，氷河の雪解け水を利用して，ムギやエンドウを栽培している。ここにはムギを醸造したチャンと言う地酒がある。

カラコルム（Ｋ２山群・フンザ）

2001年７月６日から同月16日まで、パキスタン北部のカラコルム山脈中央部のスカルドウ，カプル渓谷，ギルギット，Ｋ２山群（ゴレ，ダッソ氷河），フンザ，グルミット，コーヒスタンなどの山行を行う。主目的は世界第二の高峰Ｋ２（8,611m）を眼前に見ることであった。

ヒマラヤ，カラコルムそしてヒンドウクシの三大山脈がぶつかり合うところに位置し，壮絶な地形上にある。名うての魔の山で，登攀はイタリヤ登山隊，早稲田大学山岳部など大部隊を編成したわずかな隊が成功している。

Ｋ２は7－8,000m級の山岳に囲まれ，最奥部に位置しているので全容を見るのには，パルトロ氷河のコンコルデアまで通常往復20日のトレッキングが必要とされる。

しかし，私たちは，パキスタンの軍用ヘリを利用し，わずか一日の行程でＫ２の前面の氷河に着地しようとした。無謀な賭けであった。数日前，別グループが，同じように，コンコルデアに下りた途端，４人が直ちに高山病でダーン，同じヘリで病院に運ばれた。以降フライトは保留になっていた。私たちは交渉の結果，隣のゴレ氷河なら何とかやってみようと当局のＯＫが出た。

有視界飛行でパイロットの腕ひとつにかかる。世界でも有数の悪気流の巻く地帯。それに機内は機密構造でないので，高度5,000m以上の上昇はできない。周りの山々は7,000m以上。中腹の大岩壁を縫うように抜ける。

冷や汗をかきながら，やっとゴレ氷河に着地。海抜は4,600m。荒涼とした山岳群の真っ只中にある。前面にＫ２が直立。恐ろしい重量感。圧倒的な迫力に打ちのめされる。頂上付近に雲が巻き上がっている。姿を現すことはめったにないという。眼を周りに転じると，マッシュブルム，ガッシュブルム，ブロードピークなどの名だたる名峰が立ちはだかる。

このような荒涼とした氷河の堆石の間に鮮やかな紅紫色の花の群落があった。草丈20cm程，ヤナギランの仲間でないかと思われる。ガイドの話では，Ｋ２の名花として知られている。他には地衣類以外植物の姿はなかった。この絶妙の地でたったの15分。これ以上の滞在は高山病のおそれあり。気流の急変のおそれもある。ヘリはプロペラを回転して待っている。慌てふためいて飛び乗った。

Ｋ２の登山基地スカルドウに戻る。ここのシャングリアホテルは神秘な湖畔の別天地で，高峻な山岳に囲まれている。湖は氷河からの湧水でできており，マスが泳いでいる。水面にはポリゴールム（タデ科）が赤紫の花をつけている。

ヒマラヤは神々の座。カラコルムは悪魔の居所。針や刃の岩峰が目立つ。Ｋ２山群以外にフンザ山群のラカポシ、ハラモシュ，フンザピーク，レデイズフィンガー，デラン，カテドラル，ウルタル。それにヒマラヤ山系に入るが，キルマンテンの呼び名のナンガーバルバット。鋭い牙の切れ味を見せる。

この壮絶な岩肌に抱かれて，この世の桃源郷フンザがある。かってのフンザ王国の居城アルチットフォートの麓に村落が眠っている。たわわに実るアンズ。ここもかってはシルクロードの要衝であった。その沿道には地中海方面原産のルリタマアザミなど渡来植物が見られた。人里離れた空地にケシの群落があった。栽培されているのかどうかわからない。仏教伝来の道筋でもあり，ガンダーラに通じている。岩壁には磨崖佛や線画がある。またローマからアレキサンダー軍がこの近くまで侵攻している。グルミット村に入ると，碧眼金髪の子供たちが寄ってくる。貧しくとも，平和な地だ。フンザはまた，コーカサスのアベルバイジャンとともに，不老長寿の地として有名。長髪の屈託のない老人によく出会った。清浄な大気やミネラル分の水，ヨーグルトの常食，労働，ストレスのないことなどが取り上げられている。

古い歴史の町には植物も多い。周りの荒涼とした乾燥地帯に囲まれて，ここは緑のオアシスである。傾斜地の段々畑には，コムギ，オオムギ，キビ，アワ，トウモロコシ，ソバ，バレイショ，ササゲ，ダイズが栽培されている。住居や道筋の樹木はポプラ，アンズ，ヒマラヤスギ，ニレ，ドロノキ，ヤナギ，サンザシ，クルミ，ザクロなどが多い。付近の雑草はヨモギ，アカザ，タデ，ギシギシ，セリ類，野バラ，タンポポなど。陰地にはアマドコロ，フウロソウなど。シダ植物は意外に貧弱でアジアンタムが見られただけであった。砂漠は，砂中にハマウツボそれにハリマメ，ハルマラソウなど刺のある限られた種類が見られた。高山の湿原にはヤナギラン，ダイオウ，サクラソウ属，キンポウゲなどがあった。

フンザ周辺には小動物が多く，私たち滞在中に氷河の近くでユキヒョウの死んでいるのが発見された。同種の剥製はこの地のマルコポーロ博物館でも見られる。

チベット高原

1998年８月４日から同16日までチベット高原の山旅を行う。中国最大の内陸湖青海湖（湖面標高3，100m），象皮山（3,800m），チャカ塩湖，砂漠の大都市ゴルムド，長江源流，タンクラ峠，チベット自治区ラサなどを訪れ

る。

青海湖の南岸は，菜の花の黄色で埋め尽くされていた。濃度の低い塩湖で，透明度は高く，名のとおり紺碧の美しい湖であった。岸辺の近くにホテルがあり，村落が点在している。造船所があるが，レールは水の中に没していて，廃墟である。このあたりの水中に藻類が茂っていた。しかし，水草はなかった。湖と注ぐ小川には固有の魚が棲んでいる。ナマズのようにぬるぬるしていて鱗がない。個体数は多いが，他種は見かけなかった。

西隣にチャカ塩湖がある。チベットが太古に海であった時代，最後の海水がここに残ったと言う。岩塩の世界最大の埋蔵量を誇る。製塩工場があり，レールが湖中まで敷設されている。

ゴルムドは，ゴビ，タクラマカンの両砂漠，チベット高原の接点に開発された近代都市である。砂漠の真っ只中に蜃気楼のように浮かぶ。広大な中国西南部の交通の要衝と石油資源の採掘などの布石としての位置ずけにある。鉄道駅前広場は大都市の賑わいと貫禄がある。

チベット高原を南下すると，次第に海抜があがり，やがて4,000mの台地になる。コンロン山脈のコンロン峠を横切り，更に広大無辺の乾燥台地のガタガタ道を揺られて走る。はるかな旅の末，タンクラ山脈にかかるあたりに湿原に出る。一部地域は最近の異常気象の大雨で湖になっている。ここが大河長江の源流である。湿原にはキク科の塊状植物，タデ，セリ，キンポウゲ，サクラソウ属などが生育していた。

ここから急な登りをジグザクに昇る。海抜5,000mを越えると誰もが大なり，小なり高山病の症状が出始める。やがて最高所タンクラ峠に達する。海抜は5,231m。チベット民が山の神に捧げるチョルテンの極彩色の幟がカタカタと鳴っていた。雲ははるか下にあった。

ここからチベットの都ラサ（3,650m）まで一路下る。途中ツルブ寺（4,200m）に寄る。異様な密教寺院でヤク，クマなどの野生獣のミイラが薄暗い廊下に釣り下げてあった。あたりは断崖絶壁の下の渓谷で，多くの高山植物が見られた。崖の斜面に青いけしを見つけた。限られたところに数本。メコノプシス ベトニキフォリアである。少しうつむきかげんに濃紺の数花をつけていた。それは灯っているようであった。

タクラマカン砂漠

1999年5月27日から6月10まで，四輪駆動車でタクラマカン砂漠を縦断する。まずトルファンから，天山の聖なる湖天池を訪れてから，一路南下し砂漠の旅が始まる。コルラ，クチャ，ニヤ，ケリヤ，ホータン，ヤルカンド，カシュガルなどのオアシスの町を通過しながら，ペゼクリク，マリクワトなどの故城の見学やボストン湖とカラクリ湖の野外観察を行う。

空に飛ぶ鳥なく，地に走る獣なし。法顕はタクラマカン砂漠をこのように記した。今はクチャからニヤまで塔里木砂漠公路と呼ぶハイウエーができている。時速100キロで飛ばして11時間。夢のようである。しかし，開けたのはハイウエーの一線だけ。両側は依然として，広大無辺の死の砂漠に違いない。

このような苛酷な世界にも適応した動植物がいる。ごく一部のオアシスや窪地の湿地などに限られる。

植物では立って千年，座して千年，寝て千年と言われる長寿木胡楊。砂漠唯一の美花タマリスク。唯一の食資源スナヤツメ。幻の薬草マオウ（大余）などがある。いずれも根は砂漠の地下水に達している。

動物では，フタコブラクダ，オオカミ，カラス，タカ，トカゲ，ヘビ，サソリ，アカタテハなどいるが，種類不詳のものもある。固有種では，スナネズミ，サバクヒタキ，ミドリヒキガエルなどが知られている。

ボストン湖は，さまよえる湖ロブノールと水源を同じくすると言われている。現在は湖岸一面に葦が群生していて，ハイウエーの砂防柵に利用されている。

カラクリ湖は，濃紺で7,000級のコングールとムスターグアタ峰を湖面に映す，すばらしい景観である。わずかにマス類が生息している。草木の姿はほとんどない。この地はパミール高原にある。

おわりに

観察事項はそれぞれ地域のところで述べたが，つぎに補完事項，背景そして問題点を取り上げる。

1，ヒマラヤ山系と北部の砂漠地帯は乾燥高地で，生物の生育環境が類似している。またシルクロードなど古来，東西の交通ルートが通っていて，植物もそれに乗って運ばれた。沿道やオアシスの村落には共通の植物が育っている。

2，フンザ，ギルギット，スカルドウなど山岳観光基地に，近年西欧的なホテルの増設が進んでいる。園芸植物が山野に逸出している。タチアオイ，コスモス，ジギタリスなど野生化が見られる。

3，ハッシシ（大麻）は家畜も食べないので，どこにでも蔓延しつつある。現地でもこれを利用することは，法的に禁じられている。ところが山羊でこれを食べるのが出てきている。道路の真ん中でいい気分で寝ていることがあり，ドライバーを困らせている。山羊は食べるものがないので食べているのか，いい気分になる味を覚えたのか，よくわからない。

4，カラコルムは，三大山脈がぶつかり合うところで，世界の屋根とも言われている。幾つもの巨大断層の割目が地表に出ていた。また太古の海が競り上がっ

たところで，山岳の頂上近くにイエローバンドが走っていた。

5，カラコルムの村落は，氷河の融解水に恵まれているが飲料には適さない。氷河の溶き水で灰色をしている。インダス河源流も同じである。

6，ラダック，カラコルムなどの乾燥地帯でも幽邃な渓谷はあるが，なぜかシダ植物を見ることが少ない。

7，カラコルムはコムギ発祥の地として知られている。木原カラコルム探検隊のタルホコムギの記録があるコムギゆかりの地であるが，近年コムギ栽培が疎遠になっている。山地で採算が合わないからだろう。コムギ畑が放置され，野生に帰ったのもあった。

8，現地で撮影した写真は，その一部を後に掲げた。なお，この写真は神戸国際交流プラザ（神戸市西区学園都市）の民族資料展で展示してきたものもある。

参考文献

梶原洋一．1991．インドヒマラヤの植物．兵庫生物，10：75-83.

白石卓巳．2001．雲南玉龍雪山で見たシダ．兵庫生物，12：107-111.

小松義夫．1983．K2に挑む．新潮社.

木原 均．1956．砂漠と氷河の探険．朝日新聞社.

ｱﾚﾝ･E ﾊﾞﾆｸ．1960．不老長寿の秘境．河出書房.

大森 栄．1960．秘境ヒマラヤ．二見書房.

林 弥栄．1986．原色世界植物大図鑑．北隆館.

Barbara Everard．1970．Wild Flower of the World.

（エベレスト山群）

写真１　最高峰エベレスト

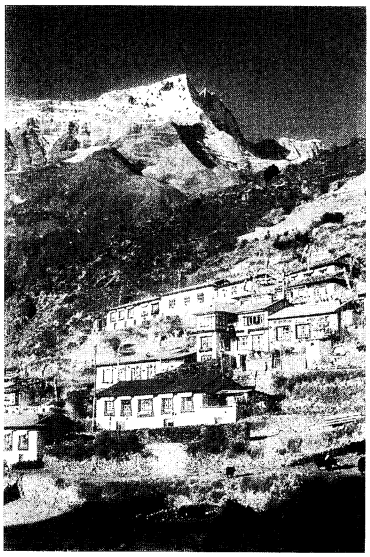


写真２　山の町ナムチャバザール

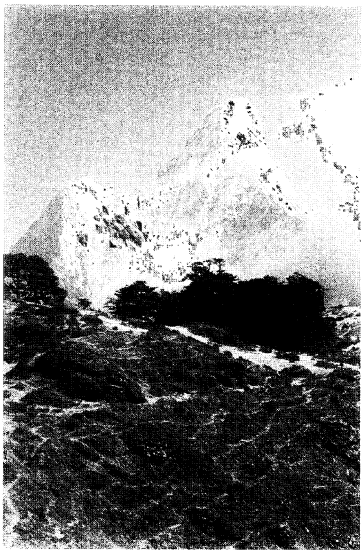


写真３　奇峰アマタブラム

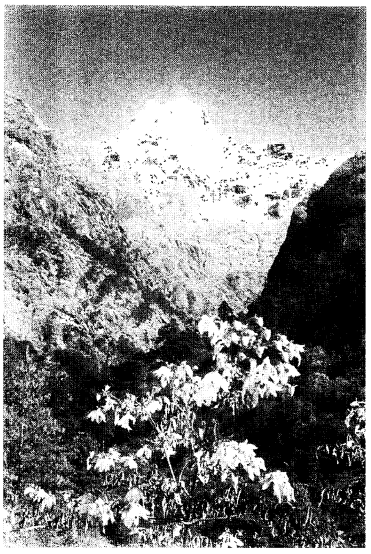


写真４　美花とタムセルク峰

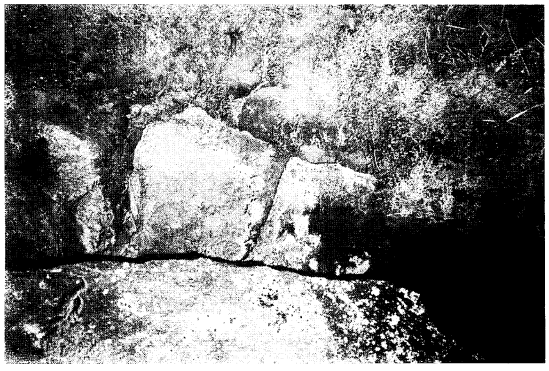


写真５　ヒカリゴケ類似の苔

写真６　雪男（イエテ）の頭髪

写真７　チトワン自然公園

写真８　チトワン自然公園のインドサイ

（ラダック）

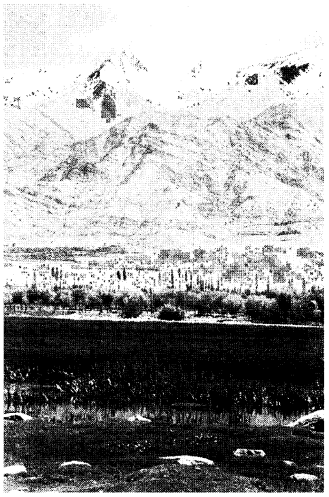


写真９　乾燥地帯の中の湿原

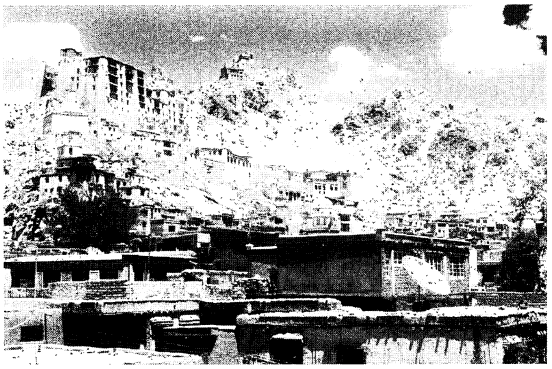


写真10　レーの古城

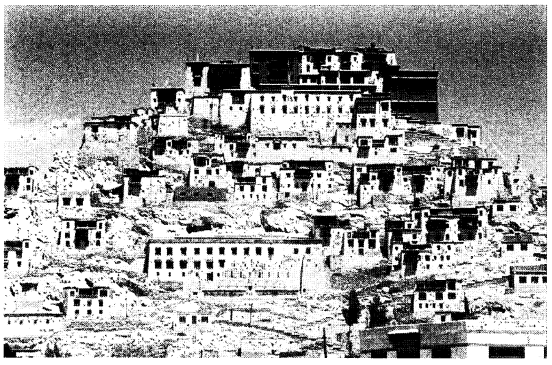


写真11　チベット仏教寺院

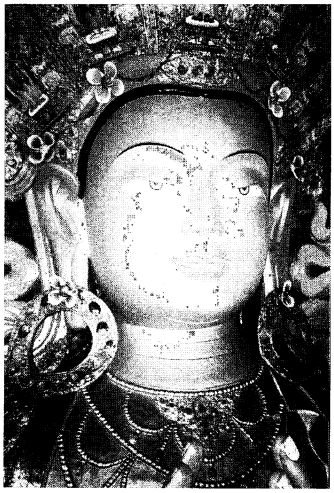


写真12　不毛の地の黄金の大仏

（カラコルム）

写真13　神聖Ｋ２

写真14　名峰マッシュブルム

写真15　未踏レデーズフィンガー

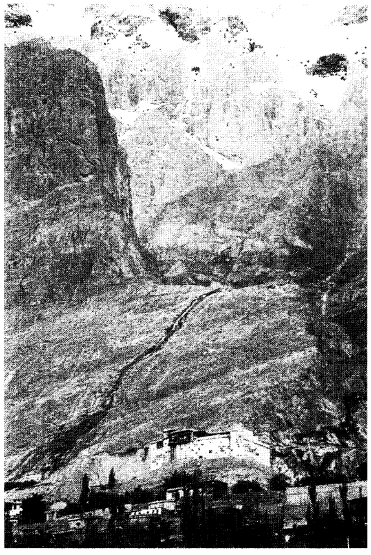


写真16　王城アルチットフォート

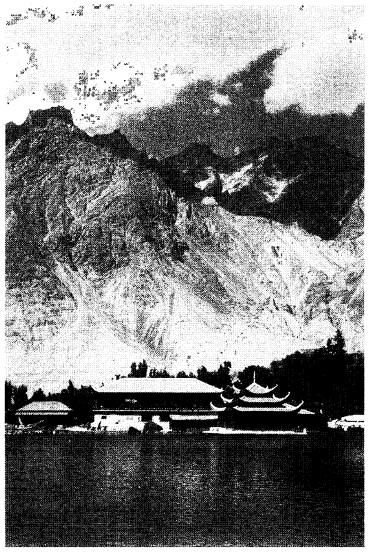


写真17　スカルドの高山湖

写真18　インダス源流の吊り橋

写真19　Ｋ２の名花

写真20　ユキヒョウの剥製

写真21　フンザの長寿者

写真22　コーカソイドの美少女

写真23　砂漠のハマウツボ

写真24　高地に広がるハッシシ

写真25　沿道のルリタマアザミ

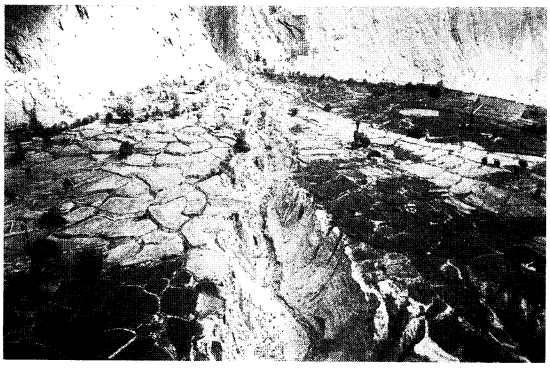


写真26　地表を走る巨大断層

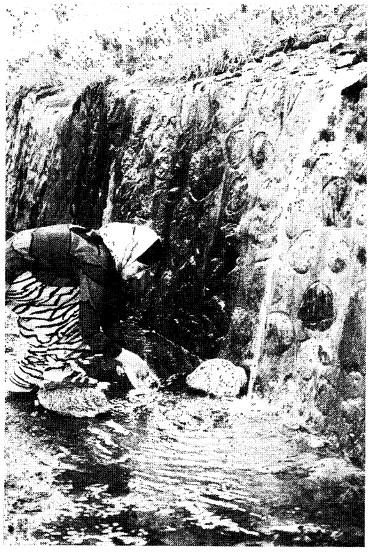


写真27　崖下の高熱温泉

（チベット高原）

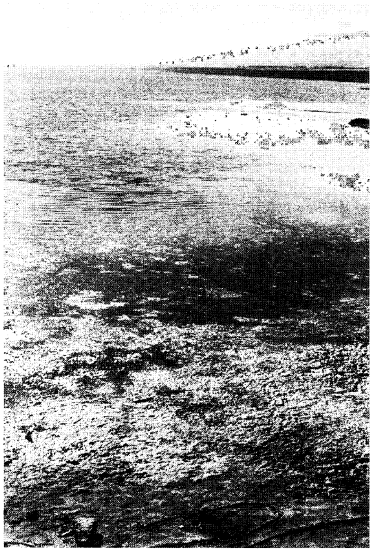


写真28　青海湖岸の藻類

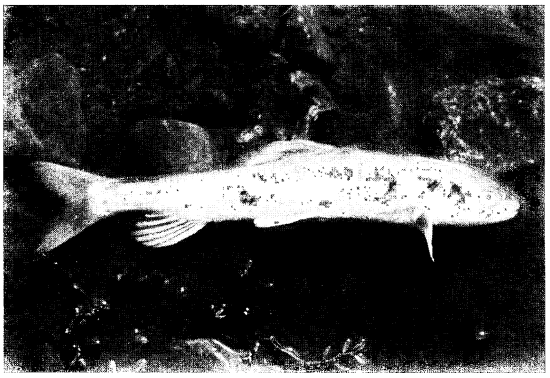


写真29　青海湖固有の魚

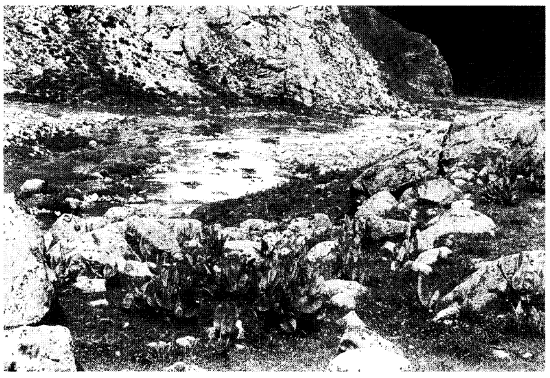


写真30　長江源流域の草本

写真31　青いケシ　メコノプシス

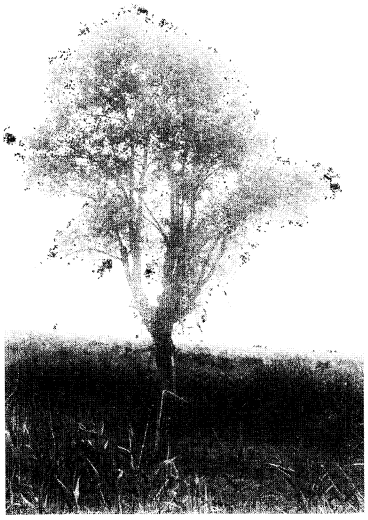


写真32　長寿の木胡楊

（タクラマカン砂漠）

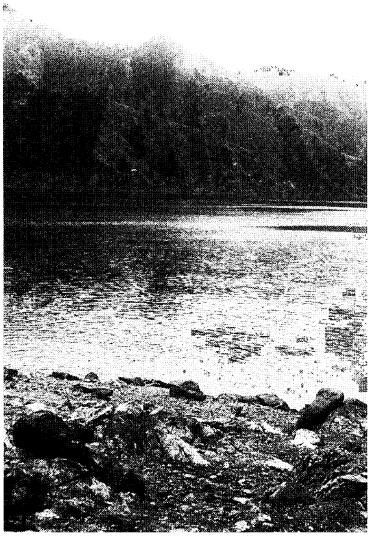


写真33　神域天池

写真34　ヒンズークシの高峰

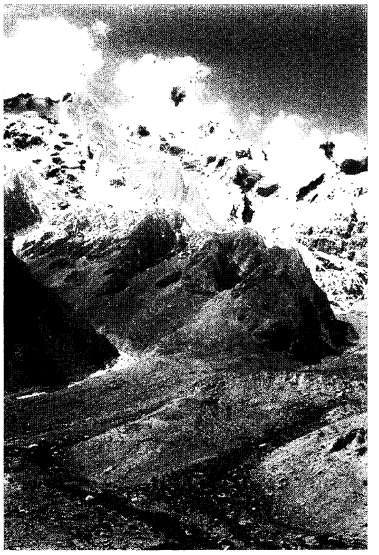


写真35　同上

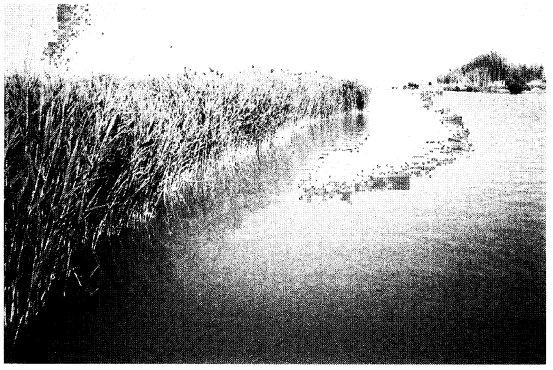


写真36　芦原ボストン湖

写真37　パミール高原風景

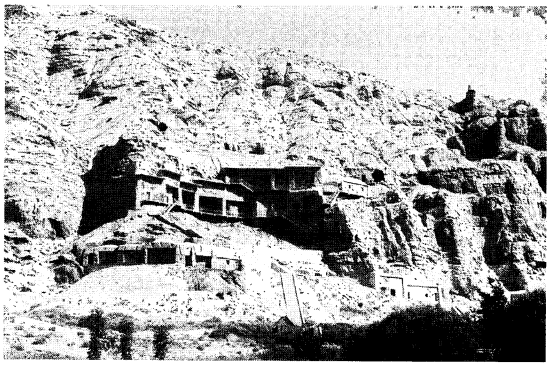


写真38　マリクワト古城

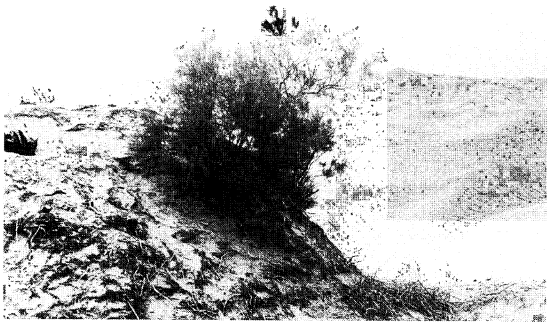


写真39　砂漠の美花タマリスク